逃げ出した
神の伝説

立川　みどり

other-world
(アザー・ワールド)

切り立つような断崖を背にして建てられた石造りの岩窟神殿の前に、神官たちに付き添われ、七人の着飾った娘たちが立っている。「神の花嫁」と呼ばれる巫女の候補者として選ばれただけあって、美しい娘ばかりだ。

誇らかな笑みをたたえた娘たちの中で、ただひとり、顔を強張らせ、神殿をにらみつけている娘がいる。黒い髪と茶色の瞳の勝ち気そうな娘で、名はサシャという。美貌のゆえに選ばれたのだと信じて疑わぬ娘たちのなかで彼女だけが、自分たちは売られたのだと気づいていた。

サシャは幼いころに両親を亡くし、遠縁の猟師の一家に身を寄せていた。サシャが巫女候補に選ばれたのと引き換えに、猟師は数枚の金貨を手に入れた。他の六人も、身寄りがないか、あるいは家族の愛よりもパンの方が大切なほど貧しい家の娘たちだった。

神殿に祀られているのは荒ぶれる災いの神エデシュである。神に外を出歩かれては災いが撒き散らされるがゆえに、人々は神を崇め、壮麗な神殿を築いたのだった。神を神殿に封じ込め、外に出ようという気を起こさせないように、神に仕え、神をなだめる花嫁の巫女を選ぶ儀式が今から始まろうとしている。

「これはいけにえじゃないの」

サシャがつぶやくのを聞きとがめて、神官たちがじろりとにらんだ。

サシャとて、猟師の家に戻りたいわけではない。養家では、子供のころから肩身の狭い思いをしてきたし、こき使われもした。猟師の息子たちの好色な視線も不愉快だった。いつか出て行くつもりをしていたが、巫女になるなどまっぴらだ。いくら猟師の家を出て、食べ物の不自由のない生活が約束されていても、一生を神殿の薄闇に閉じ込められて暮らす気にはなれない。金貨と引き換えに売られたと知っているだけに、サシャの憤りは倍加していた。

それに、七人の中に、エデシュ神の気に入る娘がひとりもなければ、花嫁を与えられなかった神の怒りを静めるために七人とも殺されることになっている。そんなことは何百年もの昔に一度あったきりだというが、それこそ本物のいけにえだ。

七人の娘を促して表神殿の広間に入ると、神宮たちは、エデシュ神の坐す奥神殿につづく扉に向かって祈りを捧げた。この神殿には神の像はない。奥神殿につづく扉の脇に祭壇があるだけだ。災いの神は、はるか昔から地下に封じられており、あまりにも恐ろしい姿なので、巫女以外の者が神の姿を知れば災いがふりかかると言われている。

神官たちは、祭壇で神に捧げるいけにえの羊を屠ると、呪文のような祈りの文句とともに扉を開いた。凶暴な獣のあぎとのように見える奥神殿への入り口を前にして、誇らかだった娘たちの顔に初めて恐怖がよぎった。

神官たちに追い立てられ、娘たちは緊張と不安に震えながら奥神殿の暗黒の中へと足を踏み入れる。

天然の洞窟を利用して造られた奥神殿の通廊は、曲がりくねった下り坂となって、果てしなく続いている。神官たちの持つ松明を頼りに、暗黒の通廊を下へ下へと進むうちに、娘たちの聞から、すすり泣きがもれ始めた。

どれほど下ったろうか。一行はかなり広い部屋にたどり着いた。神官たちが地上へと戻っていき、暗闇の中に七人だけが取り残されると、幸せとは言えない境遇からの逃避と安楽な生活を夢見て巫女になりたがっていた娘たちは、すっかり気が変わっていた。

今夜巫女を選ぶのは、ここよりもさらに地下深くに封じられた災いの神。だれもが、神のお眼鏡にかないませんようにと切実に願っていた。だが、ひとりも神に気に入られないと七人とも殺されてしまうゆえ、

娘たちはみな、心の底で他の娘の不運を望んでいた。
　目が慣れてみれば、この部屋はまったくの暗闇というわけでもない。石の壁に生えたヒカリゴケの明かりで周囲がぼんやりと見てとれる。娘たちはひとところに集まって、心細げに震えている。
「何とか逃げ出せないものかしら」
　サシャがつぶやくと、娘たちが泣き声で口々に答えた。
「すぐに見つかるわ」
「みんな殺されてしまうわよ」
　神殿の前では、新しい巫女の誕生を待って、神官たちが一晩じゅう祈りを捧げているはずだ。たしかに逃げるのは難しい。
「わたしたちは七人よ。神官よりも頭数は多いわ。殴って気絶させて逃げるのよ」
　サシャの言葉に、今度はだれも答えない。すすり泣きだけが周囲の静寂を破っている。そのすすり泣きもいつしか聞こえなくなっていった。
「ちょっと、みんな、眠っちゃったの？」
　サシャの呼びかけにも、周囲はしんと静まりかえっている。
「あきれた。よくこんな時に眠れるわね。みんな、なんて神経が太いの」
　不安を打ち消すように、サシャはわざと陽気な声を上げたが、相変わらずだれも答えない。みなの眠りに何か超自然の力が働いていると、サシャはうすうす気づきかけた。
「もうたくさん。わたしは逃げるわよ」
　言い捨てると、サシャは、手探りとヒカリゴケの明かりを頼りに出口を探した。まもなく壁と同じ石材で造られた扉を見つけ、押し開けて部屋を出たが、そのとたん、足元の段差に気づかず前のめりになった。
　あやうく転びかけたとき、だれかがサシャの体を受け止めた。
　驚いたサシャの顔のすぐそばに、ヒカリゴケのかすかな明かりに照らされて、闇に溶け込むかのような黒い髪にふちどられた若い男の顔がほの白く浮かび上がった。この世にこれほど美しい男があろうかと驚くほどの若者の美貌と、まっすぐ見つめる黒い瞳に、サシャは頬を赤らめた。
「あなたはだれよ？　何でこんなところにいるの？」
　サシャの問いに、若者は返事に困ったように微笑した。
「ここは災いの神さまの神殿よ。見つかったら大変だわ。さっさと逃げるのよ」
「逃げられない」
「何言ってるの。殺されるわよ」
　よく考えてみれば、災いの神エデシュででもなければ、こんなところにいるはずはないのだが、若者の悲しげなほど繊細な美しい顔立ちは、サシャの頭の中で、恐ろしい災いの神とは結びつかない。神殿の奥に迷いこんだ旅人に違いないと、サシャは思いこんだ。
　若者はそっと手を伸ばし、サシャの頬に触れた。若者の美貌に魅せられていたサシャは、抗うことも忘れて彼を見つめた。若者の魂がサシャの魂に触れ、差し招いた。若者の魂の凍りつくほどの孤独と、孤独よりも深い悲しみに、サシャは打ちのめされ、こんなふうに人の魂と魂がじかに触れ合うことのふしぎさにさえ考え及ばなかった。
　若者の魂はサシャの魂を欲し、導かれるままに、彼女の魂はするりと体を抜け出て若者についていった。魂の抜け出た後の体はその場に残されたのだが、サシャは、自分の魂が体を離れたことにも、若者もまた体を持たぬ魂だけの存在であることにも、まったく気づいていない。しだいに地下へと下っていることへの疑念さえ、サシャの念頭には浮かばない。サシャは、ただ若者の悲しみを癒すことだけを考えていた。
　いつしかサシャと若者の二つの魂は、互いを欲し、融合した。互いの孤独と愛と悲しみ、快楽と怒り、

魂のすべてが一つに溶け合い、かつて味わったことのない至福の時の後に、サシャは若者のすべてを理解した。
「ペテンだわ」
　闇の中で身を起こし、サシャが言った。いまやサシャは若者の正体を悟っていた。
「わたしは人間だと言った覚えはない」
　言い伝えとは違って美しい災いの神エデシュは、心外そうに答えた。
「神さまだとも言わなかったわよ。これで、わたしは一生囚われの身になってしまったわ」
「わたしは人間の一生の何百倍ものあいだ地下に封じ込められている。好きでこんな暗い所に住んでいるのではない」
「わたしを巻き添えにしなくてもいいじゃないの」
「花嫁を差し出せと、わたしのほうから人間に要求した覚えはない。おまえを花嫁に選ばなければ、七人とも神官に殺されただろう」
「ほかの娘を選ぺばよかったのに」
「七人のなかでわたしの精神と共鳴したのはおまえだけだ。ほかの娘では巫女は務まらぬ」
　サシャは不機嫌そうにぷいと立ち上がると、ふり返りもせずに元の部屋に戻っていった。
　部屋の中央に自分の体が横たえられ、六人の娘と松明を掲げた神官たちが取り囲んでいるのを見ても、サシャは驚かなかった。エデシュ神に導かれた時、自分の魂が体から抜け出したのだと、今ではサシャは知っていた。
　サシャの魂は横たわった体にすっと引き込まれた。サシャが目覚めて起き上がると、神官たちが深々と頭を下げてひざまずき、娘たちは安堵と同情と畏怖の入り混じった視線を向ける。巫女選びの儀式は終わったのだ。
　神官と娘たちが立ち去ったのち、サシャは、先ほど神に導かれたときの感覚を思い出そうとした。
　言い伝えでは、神に導かれてひとたび体から離れるこつを覚えた巫女の魂は、次から自力で体を離れることができるようになると言われている。少し時間がかかり、ぎこちなくはあったが、サシャの魂はふたたび体から抜け出し、エデシュ神のもとへと降りていった。
　サシャはもう神を許していた。神の孤独と愛、悲しみと怒り、魂のすべてを共有し、至福の時をともに過ごした後で、憎むことなどできなかった。美貌の災いの神もまた、サシャが心底から怒ってはいないことをとっくに知っており、花嫁を出迎えた。少なくともそこには、サシャが村の人間たちからは決して得られなかった、確かな魂の粋があった。

サシャの生活は、今までとは打って変わった幸福なものとなった。猟師の家で厄介者扱いされて育つうちに培われた孤独と悲しみは、エデシュ神との魂の交わりによって癒された。恋に恋する年頃の娘らしい漠然とした憧れは、神の美貌と、魂が交わるときの甘美な喜びによって満たされた。

かつて孤児のサシャを蔑んだ村人たちは、今ではなくてはならない存在としてサシャを敬い、上等な食べ物を運んでくる。猟師一家や村人たちに対する怒りと反感さえもが、美しい神との甘美な生活のうちに、しだいに忘れ去られていった。

サシャは変わったと、村人たちのだれもが思った。巫女候補になったときには、こんな不信心な娘では神の怒りを買うかもしれぬと危ぶまれたほど反抗的だったサシャだったが、今では、神々しいほどの威厳をもつ優れた巫女に変貌を遂げている。巫女の役目を忠実に果たすサシャのうちに、巫女になるのを頑なにいやがったときと変わらぬ自由への渇望が根強く潜んでいることに、村人たちはだれも気づかなかった。

サシャは、自分の思いを心のなかに押し込め、エデシュ神にも語らなかった。表神殿を自由に歩きまわり、テラスに立って外を眺めることができるだけ、まだしもサシャのほうが神よりも恵まれているといえる。地底の暗黒の中に何百年も封じ込められた神に外の世界への憧れを語るのは、残酷なことに思えたのだった。

だが、毎日のように魂が融合する相手に心の底を隠すのは不可能だ。サシャとエデシュ神の魂が一つに溶け合うたびに、サシャの外世界への渇望は神に伝わり、神のうちに、何百年もの間にあきらめと化していた解放への願いと、封じ込められていることへの怒りが呼び覚まされた。

サシャとエデシュ神の自由への渇望は、魂と魂の交わりのたびに影響しあい、相乗効果となって、ますます強くなっていく。サシャはこのうえなく危険な巫女だった。

サシャが抑圧された自由への願望を満たす方法は、ただ一つだけあった。サシャの身は神殿に閉じ込められており、外に出ようとすれば、表神殿に住む神官たちに阻まれるだろうが、魂だけならだれにも知られずに出ていくことができるはずだ。

サシャはその可髄性に気がついたが、実行に移すのをためらった。自分ひとりだけ望みを果たすのは、神への裏切りのように思えたのだ。たとえ一時的にでも災いの神を外に出してやるわけにはいかないのだから。

だが、とうとうサシャが誘惑に負ける日が訪れた。

ある日の神との交わりのあと、サシャの魂は、いつになく激しい外世界への渇望に衝き動かされた。

（ほんの少しのあいだだけ。すぐに戻ればかまやしないわ。どうせだれにもわからないのだもの）

サシャは、自分の体を残したまま神殿の外にさまよい出ると、久しぶりの外界にわくわくしながら、生まれ育った村とは反対の方向へと駆けて行った。魂だけで実体がないので、いくら駆けても少しも疲れない。ふと気がつくと、いつのまにか苗に浮き、風に乗って漂っている。森も野も陽光もすべてが心地よく、サシャはむさぼるように自由を楽しみ、巫女の職務を忘れ去った。

そのころ、神殿では、エデシュ神がサシャの不在に気づいていた。サシャと魂が融合したとき、いつになく激しい自由への渇望に心を揺すぶられていた神のもとに、不用意に放たれたサシャの魂の叫びが届いたのだ。

（ほんの少しのあいだだけ。すぐに戻ればかまやしないわ。どうせだれにもわからないんだもの）

サシャは知らなかったのだが、石の扉にも神殿にも災いの神を封じる力はなかった。神の妻たる巫女だけが、今までずっと、神を地下に引き留めていたのだ。その巫女が神を誘うような言葉を残してどこかに

行ってしまったのである。
　エデシュ神は、サシャの後を追うように神殿の外に出た。深い喜びが神の心を満たし、神殿はすでに過去のものとして神の意識から遠のいた。サシャのことさえ記憶の片隅に追いやり、神は去って行った。

　表神殿の神官たちは、サシャの魂がそばを通っても気づかなかったが、災いの神の逃亡はすぐにわかった。災いの神が通ったとたん、神殿の外の花や草が帯状に枯れていったからだ。
　事態を察してあわてた神官たちは、巫女の姿を捜して奥神殿に駆けつけた。
　神官たちの騒ぎをよそに、遠く離れた野原では、サシャが自由を満喫していた。この喜びをエデシュ神にも与えてやりたい。そう思うと、サシャの心は少し痛んだ。が、何といっても解放感のほうが大きい。太陽の光を存分に楽しんでから帰途についたサシャは、神殿のそばまできてようやく異常に気がついた。
　神殿のまわりの花や草木が枯れている。広い帯状になって村の方向へとつづく赤茶色の不毛地帯を呆然と眺め、サシャは、神の逃亡に気づいたのだった。
　神殿の前には、村人たちが大勢、不安そうにたたずんでいる。災いの神が解き放たれたことを知って集まったのだろう。
　急いで表神殿の広間に入って、サシャはその場の光景に驚愕した。美しい村娘が七人、巫女候補の豪華な衣装に身を包んで震えている。祭壇の上にはサシャの体が横たえられ、傍らには神官たちが立っている。ひとりの神官の手には、いけにえの羊や鶏を神に捧げる時に使われる宝刀が握られている。
　宝刀の意味するものに気づいて、サシャの魂は声にならぬ悲鳴を上げた。
　神官がサシャの体の上に宝刀を振りかざした。娘たちは小さな悲鳴を上げて思わず目を覆う。
　サシャの魂は夢中で体の中にすべり込み、祭壇から転げ降りた。宝刀は、勢いあまって祭壇に突き刺さり、神官たちは驚いてサシャを見つめる。さっきまで自分の心臓があった位置に突き立つ宝刀を見て、サシャの額からどっと冷や汗が噴き出した。
「な、何をするのよ！　わたしを殺す気？」
　サシャが神官たちにくってかかると、宝刀を手にした神官が答えた。
「おまえは巫女の資格を失った。エデシュさまが坐所から出られたのは、おまえへの愛が失せたからだ。お怒りを鎮めるためには、神さまに疎まれた巫女をいけにえとして捧げ、新しい花嫁を選ばねばならぬ」
「そんなことをしても、神さまはお戻りにならないわ」
「お気に召す花嫁を与えられれば、お戻りになるだろう」
「神さまはわたしに満足なさっている。わたしをとても愛して下さっている。それでも、何百年も閉じ込められていたら、少しぐらい外に出たくなるのはあたりまえでしょう」
「お出になられては困る。エデシュさまの歩かれた跡は、草木も畑の作物も枯れ、人には災いが降りかかる。そうさせないのが巫女の務めではないか」
「だから、巫女のわたしがエデシュさまを連れ戻しに行こうとしているんじゃないの。それなのにわたしを殺したら、災いの神さまは永久に外を歩きまわるわよ。いいえ、それだけじゃない。最愛の妻を殺された神さまの怒りってものを想像してみるのね。あんたたちは皆殺しにされるわよ」
　自分の命がかかっているだけに、サシャは必死でまくし立てた。サシャの脅かしに神官たちは動揺したようだ。互いに顔を見合わせ、ひそひそと相談してから、最も年老いた神官がおもむろに口を開いた。
「そなたの言葉は真実かもしれないし、苦しまぎれの言い逃れかもしれぬ。そなたに三日三晩の猶予をやろう。その間にエデシュさまを連れ戻すがよい。ただし、行かせるのはそなたの魂だけだ。体はここに残して行かねばならぬ。もし、三日後の日暮れまでに神さまを連れ戻せねば、そなたの命は絶たれるだろう」
　サシャは怒りに頬を紅潮させて老神官をにらみつけると、無言で祭壇から宝刀を引き抜いてその場に放

り出し、再び壇上に身を横たえた。

夕闇が垂れこめるなかを出発したサシャの魂は、災いの神の破壊の跡をたどって一晩じゅう飛びつづけた。神官たちへの激しい怒りのために我を忘れて、暗闇にも恐怖を感じない。

わたしは人質だ、とサシャは患った。今までもずっと人質だったのだ。人間は神に花嫁を与えて愛させるようにしむけ、その花嫁の命を楯にすることで、神を地底に封じつづけてきたのだ。

無力な生き物ゆえの自衛手段とはいえ、人間たちのなんとと惨く狡猾なことだろう。それにひきかえ、エデシュ神は、いつでも逃げることができたのに、花嫁として与えられた人間の娘を救うために、敢えて地下に留まっていたのではないか。

そう思うと、身勝手な人間たちのためにふたたび神を囚われの身にするのは、理不尽な気がしてきた。

それでもサシャは、エデシュ神を捜し、再び封じなければならない。まだ死にたくはないし、神がサシャの命の危険を承知のうえで逃げ出したのかどうか確かめたい。今まで囚われの身に甘んじていた神が、ついに自由のためにサシャを見殺しにしようとしているとは思いたくない。

神の愛を確信しているサシャは、初めのうち、エデシュ神はすぐに戻ってくるに違いないと思っていた。が、夜が明けるころまで飛んでも、神の軌跡は神殿から遠ざかっていくばかりだ。

（わたしの体が神殿に残されていることに、エデシュは気づいていないかもしれない）

ふいにサシャは、そう思いついた。サシャの魂が神殿を出たのを知ったとき、神は、サシャがひとりだけ先に逃げ出したのだと思いこんだのではないだろうか。それなら神は二度と戻って来るまい。

夜が明けそめるころ、本当に殺されるかもしれないという恐怖に身震いするサシャの魂に、ふいにだれかが呼びかけた。荒れ地と化したエデシュ神の軌跡の縁に、緑の髪の女神が立っている。

「わたしは森を治める者」と、女神は語りかけた。

「そなたは《災い》の巫女であろう？　エデシュのおかげでわらわは迷惑している。この惨状を見るがよい。早々に《災い》を地下に連れ戻してもらわねば困る」

怒れる森の女神に謝ってから、サシャは思わず訊ねた。

「エデシュは自ら好んで災いをもたらすわけではありません。彼が幸福に暮らせる場所は、どこにもないのでしょうか」

「愛があれば幸福であろう？　そのための巫女ではないか。それとも、そなたはもう《災い》に愛を与えることができぬのか？」

暗に、おまえはもう人質の用をなさぬのかと言われたような気がして、サシャはむっとなった。

人間たちだけでなく、同じ種族の神でさえ、巫女を人質に取ってもエデシュ神を地下に封じようと望んでいる。森の豊穣を守る女神と災いの神では、相反するのはしかたがないが……。サシャはエデシュ神がかわいそうになった。

森の女神と別れたあとで、サシャは、河の神や野の神などに出会ったが、みな、災いの神が早く封じられることを望んでいた。サシャでさえ、自分の命を救うために、エデシュ神から束の間の自由を奪おうとしている。戻ってくれないと神官たちに殺されると言えば、エデシュ神は、サシャのために自ら神殿に戻るだろう。神の愛を利用しようとしていると思うと、エデシュ神が哀れで、サシャは自分自身にさえ腹を立てた。

そのころ、災いの神エデシュは砂漠にいた。一目見た時から、エデシュ神は砂漠が気に入った。砂漠では、森や野を治める神々のうっとうしい呪詛の声を聞くことはない。それに何よりも、どこまでもつづく大地の果てしない広大さとぎらぎらとまぶしい太陽の輝きは、神殿の地下にはなかったもので、神をすっかり魅了した。

　それでもエデシュ神は、最初の日没のころまでは、すぐに神殿に戻るつもりでいた。サシャの声に誘われるように神殿を抜け出したものの、サシャが神殿に体を残しているだろうと、すぐに気がついた。
　太陽が地平線に沈み、たそがれがあたりに垂れ込めると、神はサシャの身が心配になり、
帰途に就こうとした。
　そのとき、ふいに笑い声がして、エデシュ神は傍らに一柱の女神が立っているのに気がついた。
　くるぶしまで届く金色の長い髪、赤銅色の肌、豊満な肢体の美しい女神を、災いの神は驚いて見つめた。
「やっと気がついたのね。あまり楽しそうだから、声をかけそびれたわ」
「あなたは何者なのだ？　わたしが怖くはないのか？」
「怖い？　どうして？　あなたはこんなに美しいのに」
「森の女神も野の神もわたしを恐れた。わたしは災いの神だからな」
「わたしは砂漠の女神イフェ。この砂の世界を治める者に、災いの神を恐れる必要はないわ」
　イフェ神は屈託のない笑い声を立て、エデシュ神は、何百年ぶりかで同族に出会ったことを知った。森の女神も野の神も、しよせん災いの神とは相反するもの。だが、この砂漠の神はエデシュ神と共通する性質をもつ、まったき同族だった。
　女神は災いの神の白い頬に手を伸ばした。
　あまりにも長いあいだ同族の存在を忘れていた二柱の神は、互いを欲し、融合した。人間の巫女との交わりでは味わえぬ種類の快楽に、エデシュ神はサシャのことをしばらく忘れた。そしてひとときの融合のあとでは完全に忘れ去っていた。
　エデシュ神は知らなかったのだが、イフェ神は忘却をも司る神だったのだ。砂漠を旅する人間がイフェ神のささやきを聞くと、水が欲しいということ以外、故郷も家族も自分の名もすべてを忘れて歩みつづける。ときには歩くことも忘れ、もうろうとした意識のうちに命を落とすこともあると言われている。
　同じことがエデシュ神の身にも起こっていた。あるいはイフェ神は、人間の娘でありながら美貌のエデシュ神に深く愛されたサシャを妬んだのかもしれない。
　ともあれ、災いの神は、神殿のこともサシャのことも思い出さぬまま、一晩じゅう金色の髪の女神と過ごしたのだった。

　サシャが災いの神の軌跡をたどって砂漠へと行き着いたのは、太陽が中天高く昇るころだった。
　そこでサシャは神の軌跡を見失った。草も生えぬ砂漠では、災いの神が通る前も通った後も変わりがない。サシャは神の姿を求めて、二日と二晩さまよった。
　とうとう最後の日になって、サシャは神の行方を知った。青い宝石のようなきらめく水面のオアシスで、青い髪に青い肌の美しい子供の姿をした水の精霊たちが、サシャの問いに口々に答えたのだ。
「ぼくたちの主、砂漠の女神イフェさまの新しい恋人が、災いの神さまに違いない」
「夜のように黒い髪、塩のように白い肌のとても美しい方だと、イフェさまは自慢していらしたわ」
「でも、オアシスにはお連れできないとおっしゃってた。災いの神さまなら当たり前だ」
　サシャは、ようやくエデシュ神を見つけたという安堵よりも、嫉妬と怒りに駆られて、美しい精霊たちに詰め寄った。
「砂漠の女神さまはどこにお住まいなの？」
「この砂漠全部がお住まいさ」
「でも、たいていは、このずっと先の一枚岩にいらっしゃるよ」
　精霊たちの指さす方に行くと、砂漠の中に巨大な平たい岩が突き出ているのが見えてきた。岩の上に並んで座っているのは、金の髪の美しい女神と恋しいエデシュ神。

　女神は、ふわりとサシャの前に降り立つと、豊満な肢体を誇示するかのように胸をぐいと反らせて言った。
「人の子の魂よ、何の用でわが寝所を訪れる？」
「エデシュ神をお迎えにまいりました」
　サシャの答えに、女神は高らかな笑い声をたてた。
「わたしの恋人は、おまえなぞ知らぬと言っている」
　かっとなるサシャの前にエデシュ神が降り立ち、じっと見つめた。
「わたしはおまえを知っているような気がする。おまえは誰なのだ？」
「本当にわたしを覚えていないの？」
　悲痛なサシャの思いを感じ取って、エデシュ神は動揺した。イブェ女神が横合いから口を出す。
「人の子と神はまったく異なる存在。理解しあうことなどできはしない。エデシュ、その娘は、人間どものために、あなたを地底深くに閉じこめようとしているのよ」
　女神の言葉はほとんど真実だった。サシャは返す言葉を失って黙りこみ、エデシュ神はもの問いたげにサシャを見つめる。神の視線から逃げ出すように、サシャの魂はその場を飛び去った。
　サシャは砂漠に横たわり、日没を待った。魂だけなので、砂の熱さも大気の暑さも感じない。生身の旅人にとっては暴君ともいえるぎらつく太陽も、死の国に赴いては二度と浴びられぬと思えば狂おしいほど慕わしい。本能的な死への恐怖と、神殿の地下などよりもまったき闇の死の国に行かねばならないという絶望と、エデシュ神に忘れ去られた悲しみ、それに奇妙なことに、エデシュ神に惨い仕打ちをせずにすんだことへの安堵の混じった思いが、サシャの魂を浸していた。
　ふいにサシャの傍らに、エデシュ神が現れた。サシャは、信じられないというように神を見つめる。
「人の娘よ」
　神が呼びかけた。
「おまえは、わたしを地底に閉じ込めるために来たのか？」
　幻覚でないと気づき、サシャは跳ね起きて頷いた。
「何のために？」　神が訊ねた。
「わたしのために」
　エデシュ神は当惑げに眉をしかめて言った。
「おまえはわたしに敵する者ではない。親しく近しい者のはず。おまえの魂はわたしと共鳴し、おまえの悲しみはわたしを呼び寄せる。おまえは何者なのだ？　わたしは思い出さねばならぬ」
　記憶の底に沈み忘れられたはずの絆に引き寄せられるように、エデシュ神はサシャにぴたりと寄り添った。二つの魂は互いを求め、一つに溶け合った。長い融合の時のうちに、サシャのあらゆる思い、すべての記憶が神に流れこみ、イブェ女神の忘却の魔法を打ち砕いていく。
　何もかも思い出し、サシャのおかれた苦境をも知ったエデシュ神は、驚いてサシャから身を離した。
　そのとき西に傾いていた太陽が完全に地平線に没し、突然サシャが悲鳴を上げた。神殿に残してきた体との絆が完全に断ち切られ、命を失ったことを、サシャは激しい苦痛のうちに知ったのだった。
　エデシュ神が博然と見守るうち、一陣の疾風とともに、死の馬にまたがった死の精霊が現われ、馬上からサシャの魂をつかみ上げて走り去った。

　一瞬のうちにサシャが死の精霊に連れ去られるや、エデシュ神はすぐさま後を追いかけようとた。怒りそのものと化した災いの神の行く手に砂漠の女神が立ちふさがり、呼びかける。
「愛しいエデシュよ、どこに行くの？」
「死の国に。死の神に頼んで、サシャを返してもらいにいく」
「ばかなことを……。ひとたび死の国に入った人間は二度と生き返れない。それが死の国の掟。あの娘は人間なのよ。しよせん、わたしたちとは違う、死すべき生き物ではないの」
「サシャはまだ若い。自由を望んでいながら、ついに自由を得られなかった。死の国の虜囚となるには早すぎる。サシャを助け出さねばならぬ」
　なおも引き留めようとするイフェ神をふり払い、エデシュ神は死の国を目指した。死の国の馬は速く、とっくに姿を見失っていた。が、もともと災いと死は兄弟のようなもの。エデシュ神は馬の軌跡をたどることができた。
　地の底深く、この世ならぬ死の国へと降りていくと、死の神ウパシュ自らエデシュ神を出迎えた。
「久しぶりだな、《災い》よ」
　死の神が呼びかけた。
「そなたは小賢しき人間どもの手によって封じ込められたと思っていたぞ」
「ごたくはけっこう。わが巫女を返してもらいたい」
「そなたを封じ込める人の娘を何ゆえに取り戻したがる？　死者を生き返らせることができぬくらい、知っておろうに……」
「サシャは巫女。魂が体を離れることに慣れている。生きた体なくして地上に留まることもできよう」
「なるほど」
　ウパシュ神は苦々しげな笑いを浮かべた。
「まったくそなたは災いの神よ。死の国にまで災いをもたらすと見ゆる。そなたの巫女はここにはおらぬわ」
　そう言うと、死の神は、背後に控える従者たちに合図をした。まもなく、当惑げな災いの神の前に死の精霊が馬をひいて現れた。死の国の馬は黒い翼が片方へし折れ、死の精霊は右腕に傷を負っているようだ。
「そなたの巫女のしわざよ。災いの神に仕える間に魂が人並みはずれて強くなったと見ゆる」
　死の神の言葉に、エデシュ神は驚いて言った。
「では、サシャは逃げ出したのか？」
　死の神が頷く。
「人の魂はみな、命を失って体から切り離されれば、死の精霊に抗うことなどせぬというのにな。死の国での安息よりも、亡霊となって人に恐れられることを望むものなど、《災い》の巫女ぐらいのものよ」
　エデシュ神はすぐさま地上へと上り、サシャを探した。神が歩いた後には、見るも無残な破壊の後が残され、人々の嘆き、野や森の神々の怒りの声が聞こえた。だが、災いの神は気に留めることもなく、何日もサシャを探して旅をした。
　そのころサシャは神殿に戻っていた。こんなふうに命を絶たれた理不尽さへの怒りに駆られて、死の精霊に傷を負わせて逃げ出した後、サシャは、自らの体に引かれるように、神殿に戻ったのだった。
　胸の傷も生々しく、祭壇の血だまりの中に横たわる自分の亡骸を見て、サシャの全霊は怒りに震えた。サシャは、神官や村人たちに怒りをたたきつけてやりたいと望み、復讐を欲した。

己れの存在を知らせようというサシャの意志のままに、サシャの魂は、祭壇のまわりに集まっていた神官や村人にも見えるようになり、恐ろしげな悲鳴が上がった。
サシャがぐるりと見回すと、神官や村人たちは悲鳴を上げて後ずさった。本当は走って逃げ出したいのだが、恐怖のために足がすくんで走れないのだ。
サシャの視線が血まみれの宝刀を持った神官の上に止まった。神官は、蛇ににらまれた蛙のようにサシャから目を離せぬまま、恐怖に目を見開いた。
「わたしが怖いの？　わたしを平気で殺したくせに、復讐されるのは恐ろしいのね」
嘲るようにそう言うと、サシャは神官に向かって一歩踏み出した。手を伸ばせば届くはどのところまでサシャが歩み寄ったとき、がたがた震えていた神官はすさまじい悲鳴を上げて、死の国に逃げ込もうとするかのように、己れの胸に宝刀を突き立て事切れた。
けたたましい女の悲鳴が響きわたり、とたんに金縛りの呪縛が解けたかのように、他の神官や村人たちは、わっと叫んで逃げ出した。
サシャは、神官の亡骸に手を伸ばすと、怯える魂をむりやり死体から引き離した。死してなおサシャの怒りから解放されなかったと知った神官の魂は、サシャの魂の放つ怒りと憎悪のすさまじさに恐怖し、すくみ上がった。
と、ふいに黒い翼の馬に乗った死の精霊が疾風のように現れ、神宮の魂を担ぎあげると馬を止めた。馬はサシャを見て、翼を傷つけられた時の痛みを思い出したのか、怯えたようにいなないた。
「死の精霊よ、わたしを連れていくつもり？」
精霊の黒い目を見据えて、サシャが訊ねた。怯えきった神官がひしと死の精霊に取りすがる。精霊はまっすぐサシャを見つめて口を開いた。
「怒れる娘よ、安らぎが欲しくば共に死の国に来るがよい。安らぎを拒む魂をむりに連れていくことはせぬ」
「だれが行くものですか。わたしを殺した者たちがみんな地上でのうのうと生きているというのに。あの連中を死の国に連れていけばいいのよ。わたしがあなたの仕事を増やしてあげる。わたしの命を奪った者たち全員に復讐してやるわ」
「人間に復讐するには殺せばよかろう。だが、災いの神にはどうやって復讐するのだ？」
死の精霊の言葉に、サシャは意表をつかれ、精霊を見つめた。言葉もなく立ち尽くすサシャの前で、死の精霊は馬を駆って疾風のように立ち去った。
（死の精霊は、わたしの怒りを消そうとしている）
サシャは思った。
（わたしの死の原因をつくったのは、たしかにエデシュかもしれない。でも、わたしを手にかけたのは人間ども。憎むべきは人間どもよ。わたしはエデシュを憎んではいない。だから、死の精霊は、エデシュの名を持ち出せば、わたしが怒りをそがれて安らぎを求めると思ったのに違いない。死の精霊は、わたしが自分から死の国に行こうとするように仕向けているんだわ。そんな手に乗るもんですか）
そう考えると、サシャは、逃げた神官や村人たちを追って村へと向かった。
サシャに追いつかれた人々は、死せる巫女の魂が放つ怒りと憎悪に堪えきれず、ある者は自ら命を絶って死の国に逃げ込み、ある者は狂気の中に逃げ込んだ。そのなかを死の精霊が忙しげに行き交い、時おりサシャに迷惑そうな視線を向ける。
なかでも神官たちは最もサシャの憎しみを受け、ほとんどが命を落としたが、ただひとりだけが運よく逃げのびて、神通力を持つと名高い聖者の庵にたどり着いた。
神官の訴えを聞いて、聖者はすぐさまエデシュ神を祀る村へと出発した。神官の道案内で、聖者が到着したときには、生き残った村人たちは散り散りになって逃げ出し、村は無人と化していた。

　逃げ遅れた者を残らず屠り去っても怒りの静まらぬサシャの魂は、うまく逃げおおせた者への復讐を求め、隣の村に向かおうとした。
　村を出ようとしたとたん聖者たちの姿を見つけ、サシャは、まだ逃げ遅れた者がいたのかと訝った。すぐに片方が取り逃がした神官と気づき、怒りにかっと燃え立ったが、すぐに、もうひとりが臆病な神官や村人たちとは異質な存在だと悟り、危険を感じて身構えた。
「死せる娘よ。ここはおまえのいるべき場所ではない」
　聖者の呼びかけにサシャが答える。
「わたしのいる場所はわたしが決める。おまえに指図されるいわれはない」
「おまえは死の国に行かねばならぬ」
「いやだと言ったら？」
「ならば、地上で害をなせぬように、おまえを地下に封じ込めるまでだ」
　そう言うと、聖者は、超自然の力を秘めた太古の祈りの言葉を唱えながらサシャに触れた。激しい怒りのために強大になっているとはいえ亡霊にすぎぬサシャの魂は、歌とも呪文ともつかぬ太古の言葉に込められた魔力にたちまち圧倒された。抗うこともできぬまま、サシャの魂は、エデシュ神の神殿の中へと聖者に引きずられていく。
　聖者は、奥神殿のさらに奥、エデシュ神の坐所だった地底にサシャを押し込め、巫女選びの儀式に使う部屋から地底へとつづく石の扉を太古の祈りの言葉によって封印した。
　念のために奥神殿と表神殿の境の扉をも封印したとき、聖者は、ふいにまがまがしい気配を感じ取ってふり向いた。そこに立っていたのは、美しき災いの神エデシュ。神秘の力をもつ聖者には、常人には見えぬ神の姿が見える。亡霊のサシャを封じた聖者だが、亡霊と神とでは格が違う。災いの神には手も足も出ない。
　畏怖に青ざめる聖者に、エデシュ神が口を開いた。
「常ならぬ力をもつ人間よ、サシャの魂はどこにいる？」
「この扉の向こうに」
　聖者がかすれた声で答えた。
「では、扉を開けよ」
「できませぬ。扉は封印いたしました。封印の効力が薄れるのは数百年の後。それまでは、この扉の封印は、亡霊にも、肉体を持たぬ神にも、人の父母より生まれた人の子にも解けませぬ。美しきエデシュよ、あなたにも私にも、かの娘を出してやることはかないませぬ」
　エデシュ神の無表情な顔に、一瞬、痛みとも悲しみともつかぬものがよぎった。
「美しきエデシュよ、すべてはあなたが神殿を去ったことから始まったもの。巫女はあなたに去られた科によって死に、村に災いをもたらした科によって地底に封じられたのです。あなたが望むなら、村人たちは、あなたのために新しい神殿を築き、新しい巫女を捧げるでしょう」
「巫女が殺された今となって、何ゆえに再び地底に留まらねばならぬ理由がある？」
　エデシュ神は、冷たい眼差しを聖者に向けて言った。
「わが巫女が科によって地底に封じられたと言うなら、そなたは、不運な娘の魂を地底に追いやった科によって、死の国に封じられるがよかろう」
　そう言うなり、エデシュ神は聖者の額に触れ、立ち去った。
　超自然の力を持つ聖者は、災いの刻印を押され、生まれて初めて恐怖に打ち震えた。だが、聖者の恐怖は、神殿を出て、不安におののきながら待っていた神官に声をかけたとたんに終わりを遂げた。
「安心なされ。巫女の亡霊は二つの扉で封じ込めた。だが……」
　そう言ったとたん、神殿の上から崩れ落ちた石材が聖者の頭上に落ち、聖者はふいの災難のために絶命

した。
　驚きと恐れのあまり腰を抜かした神官は、しばらくがちがち震えていたが、自分には災難がふりかかるようすがないので、やがて落ち着きを取り戻した。聖者の災難は偶然だったのだと自分に言い聞かせて、神官は、散り散りになった村人たちに知らせるべく去って行った。

サシャの亡霊が封じ込められたと聞いて、村人たちは、恐怖が覚めやらぬままに故郷の村に帰ってきた。いつサシャの亡霊が逃げ出すか、災いの神が気まぐれに戻ってくるかと思うと恐ろしくはあったが、やはり住み慣れた故郷に戻りたかったのだ。というのも、彼らが移り住んだ村や町の人々は、亡霊に呪われた村の出身者と知ると、とばっちりを恐れて、つらく当たったのである。

サシャの封印がどのくらいの効力を持つのかわからぬ村人たちは、相談のすえ、サシャの魂をなだめるために女神の称号を与えて祀ることにした。かつてのエデシュ神の神殿は、サシャ女神の神殿と名を変え、その隣には、災いの神が戻って来たときのために、より壮大な神殿が築かれた。

二柱の神に仕えるために、村じゅうから美男美女が七人ずつ選び出された。七人の美しい娘たちは、神の花嫁たる巫女候補として新しいエデシュ神の神殿に住み、七人の美しい若者たちは、女神の花婿たる巫者候補としてサシャの神殿に住むことになった。彼らは、エデシュ神が戻ってきたとき、あるいはサシャの封印が解けたとき、神の愛を得て神殿に留まらせる役割を担っていた。

村人たち、とくに巫女や巫者候補の美男美女たちの恐れにもかかわらず、長いあいだ、災いの神が戻ってくることも、サシャの亡霊が地底から抜け出すこともなく、村では、かつての災難が嘘のような平和な日々がつづいていた。

そんなある日のこと、サシャの神殿に礼拝した赤い髪の娘が、すぐには帰ろうとせずに、近くの木の陰にひそんで、湖のような青緑の瞳でじっと神殿のようすを窺っていた。

娘がずっと恋している美しい若者は、巫者候補に選ばれて神殿に住んでおり、娘は、恋しい人にひとめ会いたくてたまらなくなったのである。

長い時間木の陰に潜み、ようやく娘は、ひとりでテラスにたたずむ目当ての美青年を見つけて声をかけた。ぺつだん娘に恋していなかった若者は、驚いて娘を追い返した。

傷心の娘は、神殿を出ると、村への近道の荒れ地に踏み入った。

娘は知らなかったのだが、荒れ地には災いの神エデシュがひっそりと隠れ住み、サシャの封印を解く機会を窺っていた。めったに人の通らぬ荒れ地を、首をうなだれてとぼとぼ歩く娘の姿を見て、エデシュ神はそっと近づくと、娘の口から体内に入って子宮の内に宿った。

娘は、ふいに何か恐ろしい気配を感じて気を失い、ずいぶん時間がたってから目を覚ました。片恋の若者より何十倍も美しい若者の夢を見ていたような気がして、娘はしばらくぼうっと物思いに浸ると、やがて村に帰っていった。

エデシュ神は、娘の胎内で、体を持たぬ神でも、人の父母より生まれた人の子でもない、神の魂と人の体を持つ赤子にと育っていった。身に覚えのない娘は、いつも空腹を覚えるようになり胴が太くなっていっても、己が胎内に宿った生命にはなかなか気がつかない。やがて娘よりも先に母親が気づいて問い詰めたが、身に覚えのない娘は怯えるばかりで、当然のことながら相手の名を答えようとはしない。

胎児の肉体を手に入れたエデシュ神は、体が充分成長するまで村人に怪しまれないために、己が記憶と力のほとんどを封印した。自分が神であることを忘れ、体を持たずに魂のみで浮遊するすべを忘れた。

それでもエデシュ神はやはり災いの神だった。災いは最初、母体となった娘にふりかかった。

娘の腹が目立つようになると、娘は近所じゅうの好奇の目にさらされ、両親には、腹の子の父はだれかと答えようのない質問を浴びせられ、不行状を責められた。胎内の子は、娘にとって災い以外の何者でもなく、超自然の子ではないかと本能的に悟っているだけに、恐怖の的ですらあった。

さらに、誕生のときに、エデシュ神は娘の恋する美青年に災いをもたらした。陣痛の苦痛と、何が生まれ

るかもしれぬという恐怖のなかで、娘は夢中で恋しい人の名を呼び、聞きつけた産婆は、それが赤子の父の名だと思い込んだ。
　サシャ神の花婿になるかもしれぬ若者が村の娘と契ったと信じこんだ産婆は、驚き恐れて神官たちに訴え、まったく身に覚えのない美青年は、娘を恨み罵りながら、女神の怒りを恐れる村人や神官たちの手にかかって惨殺された。
　次に災いがふりかかったのは、赤子を取り上げた産婆だった。恋人を殺されて半ば狂気に陥った娘に短刀で刺し殺されたのである。娘は、己が腹を痛めて産んだわが子ならぬ赤子をも刺し殺そうとして、気づいた両親に阻まれ、部屋に閉じ込められた。
　神官や村人たちは、狂った娘と赤子を一度は殺そうと考えたが、赤子の並はずれた美しさを見て気が変わり、ふたりの命を助けて、娘の両親に任せることにした。サシャ神の怒りを買ったかもしれぬ母子ではあるが、この赤子が成長した暁にはさぞかし美しい若者となり、女神の寵を得て、村を災いから救うのに役立つかもしれないと期待したのである。
　赤子はサームと名づけられ、傷心の祖父母に育てられた。老夫婦は、不幸な出生のサームを、狂気に追いやられた娘のために憎みながらも、あまりの美しさ愛くるしさゆえに愛さずにはいられなかった。ことに、物心つき始めた幼子が、とても悲しそうな女の人の夢を見ると泣きじゃくりながら言うのを聞くと、母親が恋しいのかと不憫でいとおしくなる。よもや、その夢の女が恐ろしいサシャ神とは、老夫婦にわかるはずもなかった。
　サームが三歳の誕生日を迎えてまもなく、気のふれた若い母親は、隣室から聞こえる幼子の笑い声に、発作的に恐怖と憎悪を呼び覚まされ、ランプを取り上げると寝床の上に投げ出した。
　まもなくシーツが燃えはじめ、火はたちまち部屋じゅうに広がっていく。恋人を死に追いやった、わが子でも人でもないはずの子供が、炎に取り巻かれて焼け死ぬところを想像して、狂女は甲高い笑い声を立てた。
　隣室の窓際で遊んでいたサームは、火に驚いたはずみで窓から転がり落ちて運良く助かったが、かわいがってくれた祖父母と狂った母親は炎に巻かれて焼け死んだ。
　孤児になったサームに、村人たちは食べ物や衣類を与えた。だが、焼け跡に住む幼子を引き取ろうと言い出す者はだれもいない。両親と祖父母の死を呼んだサームに、村人たちは、本能的に不吉なものを感じ取ったのだった。
　サームは、かつてわが家だったものの残骸で太陽や雨露をしのぎ、愛は与えぬが食べ物は与えてくれる村人たちに養われ、ときには村人たちのその場しのぎの用を足して日銭を稼ぎながら、美しい少年に成長していった。
　ほとんどの村人たちはサームを忌み嫌っていたが、若い娘たちには、漆黒の髪にふちどられた彫刻のような彼の美貌にすっかり魅せられ、不吉な噂にもかかわらず恋するようになった者が何人もいた。ある娘は片恋のつらさに河に身を投げ、彼女に恋していた若者はサームを憎んだ。また、ある仲の良かった姉妹は、サームの気を引こうと争って仲たがいし、その両親は彼を恨んだ。想う娘の愛を奪われた若者たちはサームを妬み、娘たちの熱狂ぶりを目にした親たちはサームを嫌った。
　サームは、娘たちの恋にも村人たちの憎悪にもいっこうに無頓着だった。サームは孤独だったが、己れの孤独を満たす者は村人たちのだれでもないと知っていたので、どれほど忌み嫌われても心は少しも痛まなかった。
　それよりもサームを苦しめたのは、自分の魂が体の中に閉じ込められているという、奇妙な考えだった。魂が肉体の束縛を離れて自由に飛翔するさまを、サームは何度も夢に見た。また、サームは、月明かりも届かぬ闇の中に閉じこめられている夢を何度も見た。

サームは闇が嫌いだったが、それでも闇から受ける閉塞感は、肉体による束縛に比べればはるかに自由なものだった。

もう一つサームを悩ませたのは、ときおり夢に見る美しい娘だった。娘は嘆き悲しんでおり、サームに腹を立て、呪ってさえいた。サームの夢の娘の話を聞いた者はみな、それは狂気のうちに死んだ母親に違いないと断言した。

だが、サームの母は赤い髪に青緑の瞳をしていたというのに、夢の中の娘は黒い髪と茶色の瞳で、いつも暗闇の中にひっそりと座っている。あの娘は母とは別人だと、サームは思った。彼女を闇の中から連れ出し、悲しみから解放してやらなければならない。理由はわからなかったが、そんな思いが、つねにサームにつきまとっていた。

サームが十六歳のとき、サシャ神の神殿に仕える神官が焼け跡を訪れ、もっとも美しい年令を過ぎた巫者候補の若者の代わりとして、サームを神殿に連れて行った。神官について行かねばならぬという奇妙な直感のままに、サームは、なぜかよく見知っている場所のように思える神殿に足を踏み入れた。

神殿に住む他の六人の巫者候補は、選り抜きの美しい若者ばかりだったが、サームの美貌の前では真昼の月のごとくかすんで見える。美青年たちは、サームの美貌を妬ましく思うとと同時に、まんいち女神が坐所から出たときの花婿役はこの新入りが受け持ってくれるだろうと考え、喜んで迎えた。

その晩、サームは、いつもよりも鮮明に、闇の中で嘆き悲しむ娘の夢を見た。夢から覚めると、サームは、何か落ち着かない衝動に駆られて寝室を抜け出し、奥神殿へとつづく扉の前に立った。

神秘の力で封印された開かずの扉と聞いていたが、肉体を持たぬ神でも人の父母より生まれた人の子でもないサームが手をかけて押すと、扉は難なく内側に開いた。このなかに入って行かねばならぬという奇妙な衝動のままに、サームは通廊を地下へと下っていく。

そのころ、他の巫女候補の美青年たちは、サームが寝室を抜け出したのに気づいて捜すうちに、開かずの扉が開いているのを見て真っ青になった。彼らは、恐くて逃げ出したかったのだが、封印の扉は二つあると聞いたことを思い出し、サームがもう一つの扉をも開ける前に止めようと勇気を奮って、暗黒の通廊に足を踏み入れた。

美青年たちがサームを見つけたのは、地下の広間だった。石の扉を開けようとしていたサームを扉から引き離し、間に合ったと胸を撫で下ろしながら、引きずるように連れて帰る。サームが手をかけていた扉がほんのわずか内側にずれ、封印がすでに解けていることに、気づいた者はいなかった。

一方、サシャもまた、封印が解けたことになかなか気づかなかった。頭上にエデシュ神の声と他の者のざわめきを聞いたような気がしたのだが、あまりにも長い虜囚の歳月のうちにサシャの希望はすっかり打ち砕かれており、糠喜びを恐れて、孤独な魂はその場に縮こまった。

閉じ込められてまもない頃には、サシャも、エデシュ神が助けにきてくれると信じて待っていた。闇の中で己れの境遇を悲観するよりも、かつて同じ孤独を味わったエデシュ神の絶望を思いやった。

だが、いつまで待ってもエデシュ神は助けに来る気配がなく、サシャの希望は潰えていった。

災いの神は、自分に仕える巫女にまで災いをもたらすのだ。そんな考えがサシャの心に浮かんだのはいつのことだったろう。いつしか、エデシュ神のことを考えると、サシャのことをすっかり忘れ去り、豊満な肢体の砂漠の女神と楽しそうに語らう姿ばかりが思い浮かぶようになっっていった。
エデシュ神が自由と同胞を得た代わりに、自分は、だれひとり語らう者もいない孤独のうちに暗闇に閉じ込められている。そう思うと、絶望と孤独に蝕まれたサシャの魂のうちで、エデシュ神に対する怒りと恨みが育まれていった。

何度となくサシャは、いつか死の精霊が言った言葉を思い出した。
「災いの神にはどうやって復讐するのだ？」

今ではサシャは、神官や村人たちへの復讐と同じくらい切実に、エデシュ神への復讐を欲していた。

長年の静寂を破って聞こえた声を、どうせ気のせいと思って無視しようとしたサシャだが、気になってたまらず、ついに封印の扉に近づいた。封印が解かれたことを知って、サシャのうちに、長いあいだに忘れ去っていた歓喜が蘇る。サシャの魂は、地上をめざして暗黒の通廊を上っていった。

表神殿との境の扉の前で、サシャは、話し声を聞きつけて立ち止まった。サームを寝室に閉じ込めて相談する巫者候補の若者たちの声だった。

「サームはなぜこんな恐ろしいことをしたんだろう？」
「サシャさまの封印は何ともなかったよな」
「女神さまが坐所からお出になれば、だれかが花婿に選ばれなければならないよ」
「並はずれた美しさからいって、サームが女神さまのお眼鏡にかなうだろう」
「そうあってくれればいいんだが……。だれも女神さまのお気に召さなければ、ぼくたちはみな殺されてしまう」
「不吉なことを言うんじゃない。第二の扉は閉ざされたままじゃないか。女神さまはお出にはならないよ」
　興味をそそられて聞き耳を立てるうちに、サシャは、おぼろげながら事情が呑み込めてきた。
（わたしが女神？　あの連中はわたしの花婿候補ってわけ？　神官や村のやつらの考えることって、なんてワンパターンなのかしら）
　あきれながら表神殿にすべり出ると、六人の美しい若者が、サシャの姿を見て恐怖と驚愕の叫びを上げた。少女のあどけなさを残したサシャの面立ちは、身の毛もよだつ恐ろしい女神という、彼らの想像するサシャ像とはかけ離れたものだったが、奥神殿から出てきたからにはサシャ女神以外の人であるはずはない。
　怯える若者たちを眺めまわし、サシャは、女神の花婿候構に選ばれるだけあって、確かに美しい男たちだと感心した。だが、このうちのだれひとりとして、憎いエデシュ神の美しさには比ぶべくもない。
「わたしの美しい花婿候補たち」
　震えながら後ずさろうとする美青年たちを見まわし、サシャが口を開いた。
「女神の花婿とは、すなわちいけにえ。村のやつらは、自分たちが助かりたいばかりに、おまえたちをわたしに捧げたのよ」
「お助け下さい、女神さま」　美青年たちのひとりが、かすれた声で訴えた。
「慈悲なら、村のやつらに乞えばよかったのよ。おまえたちをいけにえに選んだのは、村のやつらなんだから」
「女神さま、もしわたしたちのだれもお気に召さずとも、サームと申す者なら、あなたのお気に入るでしょう。サームはわたしたちのだれよりも美しい者。サームがあなたをお慰めしましょうほどに、お怒りを静めて下さいませ」
「おまえたちは、この場にはおらぬ仲間をいけにえにするつもりなの？」
　嫌悪感と怒りに駆られてサシャが声高に叫んだとき、寝室の扉がすさまじい音を立てて開き、美しい少年が転がり出た。寝室に閉じ込められていたサームが、サシャの声を聞きつけて、体当たりで錠をぶち破ったのだ。
「サーム」
　驚いた美青年たちが叫び声を上げる、それとは違う名が、思わずサシャの口をついて出た。
「エデシュ」
　サームは、エデシュ神を幼くしたような美しい顔をサシャに向け、エデシュ神と同じ黒い目で、恐れるようすもなくまっすぐにサシャを見つめた。あまりにもエデシュ神に似た容貌以上にサシャを驚かせたのは、サームの体の中に隠された魂だった。人間の少年の体を持ちながら、その魂はまさしくエデシュ神であることを、サシャは見抜き、何が起こったのかわからずに混乱したままサームを見つめた。
「美しい女神さま」
　人間の少年になりきった口調で、サームが呼びかけた。
「ぼくはあなたを知っている。ぼくは、生まれる前に、あなたに会ったことがあったはず」
　少年がエデシュ神の記憶を持ち合わせていないことを知って、サシャは怒りを掻き立てられた。
サシャが命の危険にさらされていたときイフェ神と楽しく過ごしていたエデシュ神。そのためにサシャが

命を失い、亡霊となって闇に閉じ込められていたあいだ、エデシュ神は、生きた人間の人生を過ごしていたのだ。
　激しい怒りに駆られて、サシャは少年に歩み寄ると、細い首に手をかけた。長い歳月の間に積もり積もった恨みと悲しみが一挙に噴き出し、サームを打ちのめした。苦悶に顔を歪めた少年の心臓の鼓動が停まるまさにその一瞬、少年の心がサシャに流れこみ、二つの魂が融合した。
　サシャはすべてを理解した。人ならぬエデシュ神にとって、人間の少年の肉体は牢獄以外の何物でもなかったことも、サシャを閉じ込めた封印を解くために、エデシュ神が自らを人の肉体に封じていたことも‥‥‥
　驚いてサシャが手を離すと、サームの体はどさりと床に放り出された。息絶えて床に横たわる少年の姿を見て、巫者候補の美青年たちは悲鳴を上げて神殿から逃げていく。サームの体から抜け出したエデシュ神の姿は、彼らに見えようはずはなかった。
　長年の疑惑と恨みから解放され、呆然と懐かしいエデシュ神を見つめるサシャに、人の体の束縛から解放された神は、何事もなかったかのように語りかけた。
「もうここにいる必要はない。早く立ち去ろう」
　サシャの魂は、その後も死の国に安らぐことを拒み、世界じゅうを旅して歩いた。憎悪から解放されたサシャの魂は、もはや人の目に触れることばない。とき時おり、サシャは、エデシュ神の新しい坐所を訪れた。
　今ではエデシュ神は、雨の神や天の神の坐所よりもさらに高く、いかなる生き物も住まぬ永遠の夜空を住み家としている。同じように冷たく暗くとも、そこは神殿の地下とは正反対の場所だった。星も見えれば月も見え、緑なす地上の世界を見ることもできる。何よりも、封じ込める壁も扉もないこの場所が、エデシュ神は気に入っていた。
　エデシュ神とサシャの二つの神殿には、相変わらず、神々が帰ってきたときのために、巫女候補の美しい娘と巫者候補の美しい若者が七人ずつ住んでいる。魂の姿を見ることができぬ人間には、解放され、歓喜して夜空を駆ける美しきエデシュ神とサシャの姿を知るすべはなかったのである。

逃げ出した神の伝説
http://p.booklog.jp/book/79254

著者：other-world（立川みどり＠アザー・ワールド）

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/other-world/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/79254

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/79254

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ